

説経節『日高川入相桜』を巡って：詞章研究

ANDO, Toshitsugu / 安藤, 俊次

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei journal of humanity and environment / 人間環境論集

(巻 / Volume)

11

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

2011-02-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007286>

説経節『日高川入相桜』を巡って——詞章研究——

安藤俊次

はじめに

二〇〇九年度は、奇しくも『日高川入相ひたかがわいりあひ花王ぎやくわ』（説経節では『日高川入相桜ひたかがわいりあひぎやくわ』）を都合三度演奏する機会を得た。一度目は十一月の第七回「八王子車人形と民俗芸能の公演」、二度目は同じく十一月の第九十一回「大日本素義会」、三度目は二〇一〇年三月の「義太夫教室OB演奏会」に於てである。一度目の「八王子車人形と民俗芸能の公演」は説経節で八王子車人形の地方として、二度目

の「大日本素義会」、三度目の「義太夫教室OB演奏会」は義太夫節の素浄瑠璃として。筆者が勤めたのはいずれも三味線方である。

以前より、説経節と義太夫節では、同じ『日高川入相花王』でも詞章において、大きな差異があることに小さな疑問を抱いていたが、今回連続して演奏して、その疑問が大きくなった。そこで、両者の（節はともかく）詞章を詳細に検討することにする。このことによつて、説経節の特徴をいくらかでも浮き彫りにすることが

できるのではないか。

節については、どちらも語り物の共通の特徴として、原則的にはそれぞれに固有の細かい節の集合が全体の節を構成していて、その細かい節は、例えば説経節の場合、○、△、□、ヤゴイ等々の名が付いていて、詞章の部分に適当な節が割り当てられる。現行の説経節『日高川入相桜』について、冒頭を見れば、次の通りである。

前弾 ↓ 色道はあやなき恋路の闇 ↓ △ うら吹き返す夜嵐に ↓ □ 見にしむ野辺の露深く ↓ △ 草踏み分けてようくと ↓ 詞安珍さまいのう、安珍さまいのう ↓ ハリ呼べど叫べどその人の ↓ ○ 影も形も鳴く虫のヤゴイあのみりぎりす、我が恋を、、

詞(科白)を除く、囲み文字がその細かい節の名称であり、それぞれ決まった節である。義太夫節の場合も説経節ほど単純ではないまでも、ほとんど同じような事情である。その細かい節が、説経節なら説経節の、義太夫節なら義太夫節の、固有の節である以上、節の比較はここでは意味を持たない。

なお、説経節の名称については、正本その他に「二上り浄瑠璃」「説経浄瑠璃」「説経祭文」等、また「説経」の代わりに「説教」の文字も見えるが、この論考では「説経節」で統一しておく。

説経節の沿革

説経節の淵源は極めて古い(註1)。説経には、中世に仏教の教えを態などを用いて拍子を取りながら語る唱門師による門説経・歌説経と言われた放浪芸としての説経浄瑠璃の系統があった。一方、大道芸として古くからの説話などを人形を遣って小屋で語る説経浄瑠璃の系統がある。後者は、五説経と言われる『荊萱』『俊徳丸(信徳丸)』『小栗判官』『三莊太夫』『梵天国』(後に、『荊萱』『三莊太夫』『愛護若』『信太妻』『梅若』)を演目の中心に、江戸初期、三味線を取り入れ、義太夫節に先立って栄えたが、義太夫節の台頭により、他の浄瑠璃と共に衰退、江戸後期文化年間(一八〇四―一八)に江戸に於て初代薩摩若太夫が初期のものとは異なる、祭文を取り入れたと言われる形で起こしたものである。

その後、再度衰退したが、東京近郊にはその流れが辛うじて残り、八王子では薩摩派として車人形の地方を勤め、また、十代目薩摩若太夫（内田総淑）は素語りとしても実力を示した。節としては、豪快、繊細を兼ね備えた多彩な義太夫節に対し、説経節は極めて素朴であると言って良い。「日高川入相桜」もその特徴がよく現れている。現在伝えられている演目は、五説経の内から、『萱』『信徳丸』『小栗判官』『三莊太夫』『信太妻』の他、『景清』『二谷嫩軍記』『八百屋お七』といった本来は義太夫節の演目と、新内節からと思われる『道中膝栗毛』などである。江戸末からは、人気、普及度で群を抜く義太夫節の演目が盛んに取り入れられてきたのがよく判る。

薩摩若太夫の系譜（註²）は、初代（生年不明、文化八年没）が本所四つ目の千代鶴近八、通称米千（千代鶴近八と米千が同一人物かどうかは不明）。二代目（千代鶴近太郎、初代の息子）が浅草広小路、三代目（紺屋幾蔵）が本所割下水、四代目（下駄屋七右エ門）が駒込富士前、五代目（諏訪仙之助）が板橋。この辺りまで（五代目は、文化八年〜明治十年）いわゆる江戸市中乃至は江戸圈内と言ってよいだろう。時代も既に明治に入っている。六

代目（古屋平五郎、文化十二年〜明治三十四年）は、一挙に西多摩二宮に跳ぶ。七代目（沢田春吉、嘉永四年〜大正五年）は、西多摩今井、八代目（沢田良助、明治四年〜昭和三年）、九代目（加藤健次郎、慶応元年〜昭和二十年）は、共に西多摩伊奈、十代目は二人いて、一人（浜中平治、明治三十五年〜昭和五十七年）は、西多摩大久野、もう一人（内田総淑、明治二十七年〜昭和五十九年）が、八王子谷野一町。十一代目（石川浪之助、明治三十一年〜昭和五十六年）が、八王子市川口―横山町、十二代目（古屋要平、大正十二年〜平成五年、追贈）が、小内川野である（十三代目〓当代、渡部雅彦、昭和三十四年〜、八王子市戸吹在住。但し、「説経節の会」（註³）の認定による襲名）。

このほか、初代若太夫門から出た初代薩摩津賀太夫（生年不明、嘉永二年没）は、埼玉入間川の人。その系譜は、西多摩、八王子に。また、三代目若太夫門から出た薩摩若登太夫（文化八年〜明治三十一年）は、埼玉秩父横瀬の人。さらに、五代目若太夫門から出た日暮竜卜（文政六年〜明治二十八年）は、埼玉騎西の人。同じく五代目門から出た薩摩駒木太夫（文政十一年〜大正元年）は、

八王子恩方の人。こうして見ると、説経節の中心は、六代目以降江戸を離れ、遠く西多摩、八王子、埼玉に移っていることがはっきり見て取れる。

江戸初期の説経節と江戸後期に復興した説経節とを、それぞれ前期説経節、後期説経節と呼ぶとすれば、前期説経節が廃れた(註4)のは、古い演目を踏襲し、曲調にも精彩を欠いたと思われる説経節が、新興の義太夫節の勢いに破れたためと考えるのがごく自然だと思われるのに対して、後期説経節が江戸に於いて一応の成功を見、その後江戸(東京)市中を離れ、周辺地方に流れていったのは何故か。

初代薩摩若太夫が操り人形芝居薩摩座を起こした頃、江戸に行われていた音曲は、豊後節系の常磐津節・富本節・新内節(やや遅れて清元節)、半太夫節、河東節、一中節、長唄、荻江節等々、それに義太夫節と、百花繚乱の観を呈している。そのどこに説経節が入り込む余地があったのかとさえ思われるほどである。初代は米屋、二代目はその息子であるから、米屋を継いだ可能性が高い。三代目は紺屋、四代目は下駄屋とある。初代の弟子、初代津賀太夫は神職である(仏教から出た説経節が、神

職に引き継がれるというの、日本の宗教の複雑な一面であろうか)。家元(という名称が適当かどうかは、別として)といっても、その道でのみ生計を立てる他の音

曲諸流派とはかなり事情を異にする。この点から見ると、薩摩座を立てはしたものの(三代目からは、同座を離れる)、説経節が世間に受け入れられたのは一時で、演目も『小栗判官』や『三莊太夫』といった古くから伝わったものに、義太夫節を始め、他の諸流派の演目を取り入れる工夫はされてはいるが、曲節の単調さともども、世に飽きられたのだろう、少なくとも江戸市中に於いては。

しかし、その曲節の単調さ(素朴さ、といってもいいだろう)、演目の独自性と多様性が、多くの門弟を生み、江戸周辺地域に説経節を定着させることになったのも事実ではないだろうか。農村が、歌舞伎、人形芝居の受け皿となった例は、数多く見られるが、説経節は、八王子、小河内川野、埼玉竹間沢の車人形、秩父横瀬の袱紗人形といった地域独特の人形芝居と結びついた。ここに、説経節の曲節・詞章は、本来持っている中世的性格と庶民性に地域の独自性(土臭さ)が加わった。こうして、周辺地区に伝わった説経節は、地元にながらぬ数の門弟

を持ち、二度と中央とは関わらぬまま戦争までは盛んに行われたのである。

戦後は、徐々に衰退し、辛うじて残ったのが、薩摩駒木太夫―駒和太夫の系譜を引く十代目若太夫（内田総淑）に代表される八王子薩摩派、代々の薩摩津賀太夫を受け継ぐ西多摩大久野、日暮竜卜系で初代・二代目若松若太夫に代表される熊谷―板橋の若松派、薩摩若登太夫以外の秩父横瀬である。そのどの派もほとんど絶えようとしていたのが、何とか保存伝承に努めているのが現状である。

説経節の演目

先に触れたように、説経節の原点といえる演目は、いわゆる五説経である。ここで、一例として八王子市郷土資料館所蔵の正本明細一覧表を見よう（註5）。

『小栗判官』十三冊

『三莊太夫』十二冊

『苜蓿』三冊

『志ん徳丸』二冊

以上、原典五説経
『一の谷嫩軍記』六冊

『出世景清』六冊

『日蓮上人一代記』六冊

『子敦盛』四冊

『信太妻』四冊

『源平盛衰記』四冊

『佐倉宗吾』三冊

『関取千両幟』三冊

『竹生島』三冊

『鏡山旧錦絵』二冊

『傾城阿波鳴門』二冊

『道中膝栗毛』二冊

『日高川入相桜』二冊

『伽羅先代萩』二冊

『八百屋お七』二冊

その他は、それぞれ一冊のみ

以上、原典五説経以外

合計 一〇〇冊

一冊一冊には、各演目の一段ずつ収められているものもあれば、二段、三段収められているものもあり、また、重複している段（書写した太夫が異なる場合が多い）もあって、数はあまり問題にならないが、さすがに『小栗』ものと『三莊太夫』ものが圧倒的に多い。序でながら、ほとんどが手写本で、『小栗』の内三冊と『三莊太夫』の内四冊が、江戸末期と思われる木版本（薩摩若太夫正本）である（このことは、説経節が盛んであったことの証拠となろう）。

冊数で言えば、『小栗』と『三莊太夫』が多いとはいえ、演目数では義太夫節の演目が大幅に取り入れられていることが分かる。さらに、詞章を見ると前期説経節の正本の詞章と、後期説経節の詞章とは大きく異なっている。『信太妻』ものは、一応『信太妻』としたものの、『芦屋道満大内鑑』という義太夫狂言の外題をつけているものもある。

『日高川入相掾』

義太夫節では、事情がかなり込み入っていて（註⑥）、

一通りの説明を要する。作品としては、次の二作がある。該当する段と共に挙げてみる。

一、『道成寺現在蛇鱗』うろこ 浅田一鳥・並木宗輔合作、寛保二年（一七四二）大阪豊竹座初演、時代五段物。

「清姫日高川之段」

二、『日高川入相花王』竹田小出雲（三代目）・近松半二ほか合作、宝暦九年（一七五九）、大阪竹本座初演、時代五段物。

「道行思ひの雪吹」

どちらも時代物（王代物）で、一では皇子の御位争い、二では天皇の忠臣と悪臣の争いが主筋で、これに清姫の嫉妬が絡む。ただし、内容・詞章とも両者は別物である。

少々複雑なのは、現行の『日高川入相花王』の内容が、二の『日高川入相花王』ではなくて、一の『道成寺現在蛇鱗』を原典とし、これを景事風に改作した物であるにも拘わらず、外題は『日高川入相花王』を踏襲している点である。また、一に見られる、堤の部分（清姫と、里人・飛脚・修行者との遣り取り）は、省略される。

新内節『日高川』（初代鶴賀若狭掾（享保二年一七一七年—天明六年一七八六年）作曲）は、内容・

詞章とも堤の部分も含め、『道成寺現在蛇鱗』をほぼ忠実に受け継いでいる。

さて、説経節『日高川入相桜』であるが、右に見た八

王子市郷土資料館所蔵一覽にある二冊の正本（手写本）、

〔表〕日高川入相桜 清姫道行の段 二上り浄瑠璃

〔裏〕昭和参拾参年二月吉日 二代目薩摩濱嘉」と、〔表〕

日高川 薩摩若太夫（裏）昭和五拾七年五月二十九日

芸道七十周年記念 米寿祝福芸能会 八王子労政会館

明神町』の二冊である。このほか、筆者の手にあるの

は、手写本『清姫道行 日高川入相桜 堤・渡し場・鐘楼』

（十代目薩摩若太夫Ⅱ内田総淑の正本をその弟子梅田和

子が筆写したもの）と、「民衆芸能 説経節集 解説書

上巻」所載の『日高川 清姫嫉妬の段』（十代目薩摩若

太夫Ⅱ内田総淑）、同じく『日高川 清姫嫉妬の段』（十二

代目薩摩若太夫）である。外題、段名に差異はあるものの、

内容はほとんど変わりはない。その内容・詞章は、義太

夫節『道成寺現在蛇鱗』と、当然のことに新内節『日高

川』と酷似している。

現行義太夫節の『日高川入相花王』は、堤の部分が省略されているし、かなり改作されていて、『道成寺現在

蛇鱗』の、従って新内節『日高川』の、また説経節『日高川入相桜』の詞章とは大きく異なることになったのである。

それでは、以下に多少煩雑になるかも知れないが、義太夫節『道成寺現在蛇鱗』、新内節『日高川』、説経節『日高川入相桜』、三者の詞章の違いを挙げ、比較してみよう。前もって断っておくが、説経節『日高川入相桜』は、三者の内でも最も遅く成立したものであることは間違いないが、では、義太夫から直接その詞章が伝わったのか、それとも新内節を経て伝わったのか、大いに興味あることだが、詞章の比較からだけでは、残念ながら確証を得ることとは難しい。ただ、先行の浄瑠璃二者と比較することによって、説経節『日高川入相桜』の詞章の特徴を指摘することは出来るだろう。ただし、当然のことながら、上演の条件により、抜き差し、変化のあることを断っておく。

三者の『日高川』詞章の比較 (註6)

(傍線は総て引用者)

一・先ずは、語り出しの部分

【義太夫節】

行空の道もあやなき／恋路の闇安珍立退給ふと聞キ／
はつと驚く清姫が／胸も張りさくしんゐの炎／こがれこ
がる、我ガ思ひ／心強も偽て／捨行夫トのつらにくや
いづく迄もおつかけて／恨をいほでおかふかと寝所を忍
び立出る／姿しどなき／振袖の／裏吹かへす夜嵐も

【新内節】

行空の／姿しどなき／振袖の／裏吹き返す夜嵐も

【説経節】

道はあやなき恋路の闇／裏吹き返す夜嵐も

義太夫節と新内節は、浄瑠璃（語り物）の常として、

前段からのヲクリを受けた常套句「行空の」で始まるが、説経節はその例に倣わない。

新内節も、説経節も、義太夫節の長い説明を採っていない。新内節は、「道もあやなき恋路の闇」も採っていない。一方、説経節は、「姿しどなき振袖の」がないため、「道はあやなき恋路の闇」から「裏吹き返す」への繋がりが不明である。同じ十代目若太夫の別の写本では、「空吹き返す」とあり、演者自身がその不整合を意識し、書き換えたと考えられる。その際に、義太夫節にも新内節にも当たつてみる労を取っていない。あるいは、両者に当たる術を持つていなかったためか、あるいはまた、義太夫節、新内節に原作があることが、既に念頭になかったためか。

二・清姫が堤で出逢つた里人の科白

【義太夫節】

(里) 宵闇で道筋が知れにくい／道成寺へはかふ行くと／問した顔つきうろくきよろ／それを尋るこなたのそぶり／エ、聞へた／コリヤ色じやの

く／しかも蒼の花の色

【新内節】

(里) 宵闇で道筋が知れにくい／道成寺へはこう行くかと／問われた顔付きうろ／きよろ／それを尋るこなたのそぶり／エ、聞へた／コリヤ色じゃの／／しかも蒼の花の色

【説経節】

(里) 宵闇で道筋が知れにくい／道成寺へはこう行くかと／ああ行くかと／言われた顔のうろ／きよろ／／それを尋ぬるそなたの素振り／エエ聞こえたく／こいつあ又ててつきり色じゃのおっこちじゃの／しかも蒼の花の色

説経節だけ、「ててつきり、おっこちじゃの」が挿入され、勢いチャリめいた節となる。「おっこち」は、情人、乃至は情人関係のことで、里人のからかい気分が良く出ている。

三、次に、清姫が飛脚と出会う場面

【義太夫節】

めての田の面に打つゞく井路いじのかけはし／さ、やきの／はしも／恨めしいつの世に／たが忍びあふ薄の岡／跡に見捨てて行く先へ／状箱かたげた早飛脚／行きあたつて(飛) あいたしこ

【新内節】

右手の田の面に打ち続く意地のかけ橋／ささやきの／橋も／恨めしいつの世に／誰が忍び逢う薄の岡／あとに見棄てて行く先へ／刀の鞘に／状箱担げた早飛脚／行き当たつて(飛) あいたしこ

【説経節】

右手の田の面に打ち続く意地の懸け橋／ささやきの／橋も／恨めしいつの世に／誰が忍び会うすすき野を／後に見捨てて行く先に／刀の鞘に／状箱掛けたる早飛脚(飛) ハアヤッシッシ／シシヤッシッシシヤッシッシ…

行当たつて

(飛) ア痛ててて

義太夫節にはない、「刀の鞘に」が新内節、説経節双方に取り入れられている。更に説経節には、新内節にもない「ハアヤッシッシ／＼シヤッシッシシヤッシッシ：」が挿入される。これは、人形(車人形)の振りとの兼ね合いからか。それにしても、この掛け声はどこから取り入れられたのか。義太夫節で直ぐに思い出されるのは、『ひらなか盛衰記』の「逆櫓の段」の櫓漕ぎの掛け声であるが、あるいはここから取ったものか。だとすれば、説経節に与えた義太夫の影響の大きさを確認することになる。

古風に感じられる「あいたしこ||あ痛しこ」(義太夫節、新内節)は、説経節にあつては、こんにちでも判りやすい口語「ア痛ててて」に換えられている。

四. 清姫と飛脚の遣り取り

【義太夫節】

(清) サア／＼ちやつと行きたいはいの

(飛) イヤそつちよりこつちが行きたい／急用じゃそのいた

(清) イヤ／＼聞ねば通さぬ／

(飛) ハテ扱邪魔なわろに出会った／時が切れふかしらぬ共／かいつまんでななさ成ルまい／ハテ高がこなたをほつとあいて／夜抜するといふたはいの

(清) そふしてどふじやへ

(飛) さつてもくとし問殺すは／コレ是から跡は大事の咄／とつくりといはねばならぬ／ドレ耳爰へ持つてござれ

(清) サア其跡はへ

(飛) み、つとう

【新内節】

(清) サア／＼ちやつと行きたいわいのウ

(飛) イヤそつちよりこつちが行きたい／急用じゃ、そこ退いた

(清) イヤ／＼聞かねば通さぬ、通さぬ

(飛) ハテサテ邪魔なわろに出逢うたわい／時が切りよるか知らねども／かいつまんで話さざるまい／

ハテたかがこなたを放っておいて／夜抜すると言
うたわいの

(清) そうしてどうじゃエ

(飛) さつてもくどし問い殺すは／これからあととは大事
の話／とつくりと言わねばならぬ／ドレ耳ここへ
持つてござれ

(清) さあ、そのあととはエ

(飛) あのの、ものの、耳つとう

【説経節】

(清) サア／チャット／

(飛) 何だと訊聞きチャ／／／／、チャ／／／
／、／／／／、そつちよりこつちが／急用じ
や、そこ退いた／

(清) イエ／／訊聞かねば通さぬ／

(飛) さつてもくどい奴じゃな／ウウどれ／、ウウ耳を
ここへ持つておじゃれ、言うて聞かせるほどにな、
アもつと傍へ持つておじゃれ、もつと傍へ、オ
ヤ／、これはマア大分良い匂いがするわい、こ
れは当世流行りの麝香水かな、香油かな、大分良

い匂いじゃな

(清) サア／、何と言うぞい

(飛) へへあまり匂いの良いので話をころりと忘れた

(清) アアサア／／

(飛) まつと傍へ持つておじゃれよ、まつと傍へ、アア
そうじゃ／／／／／アノノ、コノノ、耳つとん

この部分では、新内節は義太夫節をほぼ忠実に踏襲し
ているのに対して、説経節の方に大幅な変更がなされて
いる。追加部分は、飛脚の饒舌とそれによる清姫の焦り
の増幅という、一定の効果を上げていると言えよう。

五. 三人目、七墓巡りの修行者の科白

【義太夫節】

(修) 坊主を見かけて頼ミたいといやるは／家札をまく
つてくれで有ふが／こゝらに家は一軒もない／近
頃鹿相千万な／そして見ればびらしやらと／色よ
い着物／コレ惣たい幽霊といふ者は／白無垢きて
出る物じやはいの／いとしゃ其様なうつかりでは

／極楽浄土の道も知れまい／ドリヤ迷はぬ様お念
 仏で／十万おくどへやつてくりよ／なまいだく
 〱

【新内節】

(修) 坊主を見かけて頼みたいと言やるは／大方家札を
 めくつてくれであろうが／ここに家は一軒もな
 い／近頃粗相千万な幽霊どの／そして見ればびら
 りじゃりと／色よい着るもの／コレ、総体幽霊
 というものは／白無垢を着て、額に三角な紙を張
 り、柳の木の下などから、ヒュウドロく、アア
 ラ閻浮恋しやなぞと言うものじゃが／いとしやそ
 のようなうっかりでは／極楽浄土の道も知れまい
 ／どりやく、迷わぬようお念仏で／十万億土へ
 やつてくりよ／なまいだく／なむあみだ、なむあみ
 だんぶつ、なむあみだ、なんまいだく／なんまい
 く／なんまいだ、なまあみだんぶつ、なむあみだ

【説経節】

(修) 坊主を見かけ問いたいとは／大方家札か戸守りで

もめくつてくれいと頼みか／見れば刃りには一
 軒もない／近頃殊勝千万／そして見れば何やらビ
 ラシヤラくと／色良い衣服／総体幽霊という者
 は白無垢を着て、柳の下や古井戸から、オヒュウ、
 ドロくくと言うて出掛ける者じゃが／いとし
 や、そのようなうっかりでは／極楽浄土の道も知
 れまい／お念仏で／十万億土へやつてくれよう／
 なんまいだく／南無阿弥陀、南無阿弥陀ん仏、南
 無阿弥陀、なんまいだく／なんまいく／南無阿弥
 陀

ここは、説経節が新内節の影響を受けていると考えら
 れるところ。全体は、当然詞であるが、最後の念仏は、
 義太夫では節にのせたか、不明であるが、詞章からは詞
 と見るのが妥当だろう。一方、新内節も説経節も一種独
 特の節にのせて語られる。新内節に入れ事のようにある
 「額に三角な紙を張り」「アアラ閻浮恋しやなぞと言うも
 のじゃが」が、説経節にない理由は不明。

なお、義太夫節、新内節、双方に見られる「そそう鹿相(粗相)」
 が、説経節では「殊勝」となっているのは、明らかに音

の取り違いで、口承による間違いであろう。そうであるなら、説経節の詞章は、当初はともかく（義太夫節の床本を参照できたかも知れない）、口承によって変化してきた傍証になるだろう。

六、三人目、修行者の科白

【義太夫節】

(修) コレ其わろがいふたはの／若女子が此道わかいおなじをくるならば／おれは川へ身を投て／しんたといふてだましてくれ／逢てはきつふなんぎする／どふぞ跡へ戻してくれと／頼みやつたれど此坊主／嘘ついでては未来がこはさに／真直まっすくにいふそや／ア、是々其きつさうは何事／ナフこはや恐しや／おらが知つた事じやないしらぬが仏／なむあみた赦し給へお女郎／助給へ御誓願／なまいだ／なむあみだ／ぶつ

共ほう／逃足にげは行きがたしらす成にけり

【新内節】

(修) コレその和郎が言うたはの／若い女子がこの道を

くるならば／俺は川へ身を投て／死んだというて騙してくれ／逢うてはきつう難儀する／どうぞあとへ戻してくれと／頼みやつたれど、この坊主／嘘ついでては未来へ行て、赤い鬼や黒い鬼や白い鬼が出て責めるが恐さに／ママまっすくに言うぞや／アアコレ／その気相きさうは何事ぞ／ノウ怖や恐ろしや／おらが知つた事じやない、知らぬが仏／ナンマイダ。許し給えやおん女郎／助け給えや御誓願／ナマイダ／ぶつ

ともほうほう逃足は行方知れずなりにけり

【説経節】

(修) コレ／お娘や／兎角山伏と言う奴は、ブウ／と法螺を吹くのが持ち前じゃが、そこへゆくところの愚僧なぞはな、大事の所へつけておく鉦はチャ／と叩けども、決してホラは吹かぬぞよ、コレ／お娘や、もしな法螺を吹いてみる、死んでから閻魔様の前へ行つて、赤い鬼や、青い鬼に責めらるるが怖さ／ママ真直ぐに言うぞよ／コレ

くく、その血相は何事ぞノウこわや恐ろし
 や／俺らが知ったことじゃない、知らぬが、ホホ
 仏／許して給えや御女郎／助けて給えや、御誓願
 ／なんまいだく、南無阿弥陀

と共にホウく逃げ足は行方知れずなりにける

こども、義太夫から新内節を経て、説経節へという、
 道筋を強く印象づける部分である。とりわけ、「赤い鬼
 や、青い鬼に責めらるるが怖さ」に新内節の影響が認め
 られるが、「兎角山伏と言う奴は、ブウく」と法螺を吹
 くのが持ち前じゃが、そこへゆくとこの愚僧なぞはな、
 大事の所へつけておく鉦はチャンくと叩けども、決し
 てホラは吹かぬぞよ」の入れ事は、少々下掛かつては
 るものの、この場をチャリ場とする効果を存分に上げて
 いる。寧ろ、義太夫節と新内節の場合、詞章自体は、安
 珍の言葉の繰り返しが清姫の嫉妬を更に煽るとしても、
 聊か重複の感を抱かせるし、この場がチャリ場でもある
 とするなら、物足りない。説経節の、台本よりも口承の
 自在さの良さが出ていると言っても過言ではないと思わ
 れる。

七. 渡し場に着いて、舟を出してくれるよう頼む清姫に、
 舟長は、

【義太夫節】

(舟) 第一ねむたい夜が明けたら渡ししてやろ／エ、うま
 い最中を／けた、ましう起された／あたぶが悪い
 とつふやけば

【新内節】

(舟) 第一眠たいわい夜が明けたら渡ししてやろ

【説経節】

(舟) 第一眠たいわ、夜が明けたら渡ししてやろうワイ

義太夫節の傍線部は、新内節も説経節も継承していな
 い。これも、義太夫節から新内節を経て説経節に至ると
 いう仮説の傍証となるだろうか。

義太夫節の傍線部は、現行義太夫節『日高川入相花王』
 の「あつたら夢を取り逃がしたわい」に、言葉を換えて
 引き継がれている。

八、続いて、舟長の科白

【義太夫節】

(舟) 彼ノ山伏の頼ミには／様子有ツて某は道成寺へ逃
行者／十六七な女が来らば／必舟を渡してくれな
逢てはたちまち忽命チつくにも及ぶ事／若渡さば／そち
共になんぎせふ／くれぐれ頼ムといやつたりやい
つ迄も渡しやせぬならぬ／く
とつかふどなり

(清) コレなふそれはとふよくじや／たとへ渡して下さ
つても／こなたに科も難儀もかけまい／思ふ男を
人にねとられ／わしはゆかねばこがれ死／捨る命
チはおしまね共／たつた一ト云恨ことがいひたい

【新内節】

(舟) かの山伏の頼みには／様子あつてそれがしは道成
寺へ逃げ行く者／あとより十六七な女が来たらば
／必らず舟を渡してくれな／逢うては忽ち命ずく
にも及ぶこと／もし渡さば／そち共に難儀しう
／くれぐれも頼む々と、引くり返しおつくり返

し頼みやつたれば、ここは一番達引じや、渡すこ
とならぬ／ならぬ

とツコとなる

(清) これのうそれは胴欲じや／たとえ渡してくださつ
ても／こなたに科も難儀もかけまい／思う男をひ
とに寝取られ／わしは行かねば焦れ死／棄つる命
は惜しまねども／たつた一ト言恨みが言いたい

【説経節】

(舟) その山伏殿の頼みには／この後から十六、七の女子
が見えたなら／必ず船渡してくれぬな／会うては
きつい難儀する／もし渡さば／そちとも難儀し
ようと／ひっくりけえし、かつくるけえし、おつ
くるけえし頼まれたれば、いつまでいても渡すこ
とはならぬワイ

(清) アア、コレ、それはほんかいな／例え渡し下さつ
ても／こなたに難儀はかけまいものを／思う男は
人に寝取られ／私しや行かねばこがれ死に／死す
るこの身は厭わねど／たつた一言恨みが言いたい

ここで目立つのは、舟長の言葉に新内節では、「引く

り返しおっくり返し」が追加され、説経節では更に「ひ
つくりけえし、かつくるけえし、おつくるけえし」と、
強調されていること。また、舟長の前半部分は、説経節
で砕けて口語的になっていること、また、前二者に見
える「とふよく（胴欲）じや」は、「胴欲」という語が、
義太夫節では常套語であり、大阪風に聞こえるのに対し
て江戸風の「ほんかいな」に変わる。全体が、江戸口語
風に変容していると言えるのではないか。

九、清姫の重ねての頼みにも、舟長は、

【義太夫節】

(舟) おりや此年迄／こがれ死といふ者ついに見た事が

ない／さらはねながら見物せふか

と／舟ふなばりに脚すねふんぞらし苦口いふも川向ひ／喧嘩し

かけと見へにける

今はせんかた泣く目をはらひ

【新内節】

(舟) 俺あこの年まで／焦れ死というものついに見たこ

とがない／さらば寝ながら見物しようか

ト／舟梁はなばりに脛踏ん反らし

(舟) さあ、焦れ死が所望じや、所望じや

ト喧嘩仕掛けと見えにける

今は詮方泣く目を払い

【説経節】

(舟) エ、俺あこの年まで／女子の焦れ死というは見た

ことがないわ／さあらば居ながら見物しよう

と／情けを知らずの船長が、喧嘩仕掛けと見えにける

聞くより猶もせき上げて

新内節が、義太夫節の「苦口いふも川向ひ」が「さあ、

焦れ死が所望じや、所望じや」と改作されているだけな

のに対して、説経節では、その前の「舟梁ふなばりに脛踏ん反ら

し」が欠如、また同じ部分が「情けを知らずの船長が」と、

短く単純化されている。更に、これまた淨瑠璃の掛詞の

常套句「今は詮方泣く目を払い」が、「聞くより猶もせ

き上げて」と、その掛詞を犠牲にしている。これも、意

識的になされたものなのか否か、判然とはしない。

十、もはやこれまで、泳いで渡るしかない、清姫は日高川に身を投げる。その姿は、嫉妬によって蛇体となり、川を泳ぎ切り、漸く道成寺へ、

【義太夫】

逆まく浪をかき分ケく／ゆん手にしづみめてに浮ぬき手を切つてさつ／さ／さつと飛ちる水煙雲を／さそへる蛟竜の／巨海を渡るごとくにてはね立テ／けたて、およしがしんるの猛火五輪をこがし／口より吐息えん／たる／炎を吹かけ目をいからし／髪逆／振乱し／一念こつたる勢に／舟長恟りわな、き声
(舟) やれ悲しや冷じや鬼に成つた／蛇に成つた／そりやもふくるはヤレあがるは／喰殺されては成ルまい

と／舟を乗捨かけあがり／堤の原を横切レに命チからく／逃て行／清姫は一ト筋の／しんい強勢たゆまずさらず／なんなく岸根におよぎ付キ／照月影を／水鏡／見れば額に角生立／髪も形も我レながら／冷じや恐しや／しばし忙て立ツたりしが

(清) もふ此姿に成ルからは／逆連そふ望はたへた／我カそはぬから人もいや／錦の前にのめく／と／何

ンのはせふねさせふぞ／かはゆさあまつて憎さが百倍／取殺さいでおかふか

と／又かけ出す草履塚／松原／過きて行先キは／間近く見ゆる森林／むね門高塀／しろぐ／といらかならべし
道成寺

【新内節】

逆巻く浪を掻き分け掻き分け／左手に沈みに右手浮き／抜き手を切つてさあつさあつさ／さつと飛び散る水煙り、雲を／さそえる蛟竜の／湖海を渡る如くにて跳ね立て、蹴立てて泳ぎしが瞋恚の猛火、五体を焦し／口より吐く息炎々たる／焰を吹かけ目を怒らし／髪さかさまに振り乱し／一念凝つたる勢いに／舟長びっくりわななき声

(舟) やれ恐ろしや凄まじや／鬼になった／蛇になった／もう来るわ、やれ上る／なめ殺されてはなるまい

ト／舟を乗りすて駆け上り／堤の原を横切れに命からがら逃げて行く／清姫は一ト筋の／瞋恚強勢撓まず去らず／難なく岸ねに泳ぎつき／照る月影を／見渡せば／棟門高塀／しろじろと薨並べし道成寺／供養の庭にぞ着き

にける

【説経節】

逆巻く波を掻き分けく／弓手に沈み、馬手に浮き／
抜き手を切つてサツ／サ／雲を誘うる高龍の／苦界を
渡る如くにて跳ね立て／蹴立てて泳ぎける瞋恚の炎は五
体を焦がし／口より陰炎吹き出だし／髪逆立ちに振り乱
し／一念凝つたる有様に／船長びつくりわななき声

(舟) ヤアレ上がるわ、それ来るワイ／いつの間にやら、
かの女／鬼になった／蛇になった／食い殺されて
は、確かにお命やたまらぬ

と／船乗り捨てて駈け上がり／堤河原を横切りに、い
ずくともなく逃げて行く／後にも残る清姫は／難なく岸
に泳ぎ着き／照る月影に／身を映し／見れば額に角生い
立て／髪も形もあらばこそ／暫し呆れて立ち上がり

(清) もうこうなる上からは／所詮連れ添う望みは絶え
た／我添わぬ上からは／錦の前にオメ／と／お
のれ添わそう、寝かそうか／可愛さ余つて憎さ百
倍／取り殺さいでおくべきか

とある所を一散に／道成寺へと急ぎ行く／草履塚も早

や越えて／幽かに見える森林／棟門高堀／白々と薨並べ
し道成寺にと着きにける

いよいよ大詰め場面。現行文案でも、他の人形芝居
(例えば、説経節などを地方とする八王子車人形)でも、
舞台上では、浪幕、ガブの頭を用い、所狭しと人形が大
活躍をする。

新内節が、義太夫節、説経節に比べて短めなのは、人
形を用いない素浄瑠璃であるせいかな。「もふ此姿に成ル
からは」以下の清姫の科白が省略されるなど、ここでは、
新内節の特徴が顕著である一方、説経節も、義太夫節の
「しんゐの猛火」が、「瞋恚の炎」に、「口より吐息ゑ
ん／＼たる／炎を吹かけ目をいからし」が、「口より陰
炎吹き出だし」に、「喰殺されては成ルまい」が、「食い
殺されては、確かにお命やたまらぬ」になり、「しんい
強勢たゆまずさらず」が省かれるなど、やはり文語的表
現の口語化が見られる。奇妙なのは、「巨海を渡る」が、
「苦界を渡る」となっている点で、これでは意味を成さ
ない。口承による弊害の一つでもある。

「渡し場」で演奏を終える場合は、説経節では「とある所を一散に／道成寺へと急ぎ行く」で大切おちぎ（義太夫節で言う「段切り」。鐘楼の場に繋げるときは「とある」急ぎ行く）は、省略される）となる。また、現行文楽では、舟長が逃げた後、清姫が我身の姿を水に映して見て、「怪しかりける」でヲクリとなり、鐘楼の場は、清姫と三人の通行人が遣り取りする前半の堤の部分同様、普通上演されない。そもそも、堤の場と鐘楼の場が存在、あるいは現存するのも著者には不明であるが、現行文楽『目高川人相花王』渡し場は、左に参照として掲げるように、詞章はここで比較した三者と大いに異なる。

参照 現行文楽『目高川入相花王』渡し場の段（註7）

こ、は紀の国目高川、清き流れも清姫が胸の炎は夜叉鬼神、松吹く風に誘はれて只さへいと、物凄し。女心の一筋に脛もあらはにやうくと、目高の川をこ、かしこ
「安珍さまいなう、わが夫なう」

と駈廻り、呼べど叫べど松風の他に答ゆるものもなき、はや山の端にさし昇る隈なき夜半の月影は、月を欺く如

くなり、かすかに見ゆる川岸の、もやひし舟に

「ハア、嬉しや、こ、は目高の渡し場、これを越ゆれば道成寺へ間もなし、渡り頼まん急がん」

と川の汀に立ち寄りて

「なうその舟早う渡してたべ、渡し守どの、くいなう、コレなうく」

と呼ぶ声も枯野の秋の舟ならで、渡りかねるぞ甲斐もなき。

寝耳にふつと舟長は苦押ししのけて仏頂面、

「エ、何ぢや、喧しいわい。夜々中がやくと、『早うく』のその声で、あつたら夢を取逃がしたわい。夜が明けたらば渡してやらう、エ、コレよう寝ている者を、アタ鈍くさい」

とつかうどに顔をしかめてつぶやけば、

「なう自らは道成寺へ急ぐ者、早うこ、を渡してたべ、サ早うく」

「エ何ぢや、鱈汁が食ひたい、アハ、ハ、ハ、テモ嫌らしい奴ぢやわい、ハ、ア聞えた、コリヤ何ぢやな、宵に渡した山伏の後追うてきた女ぢやな、エ、それなればなほ渡されぬ、ならぬく」

にべもなき詞に姫は涙声、

「エ、そりや胴慾ぢや〜〜わいなう、親の許したわが夫を他所の女子に寝取られて、何とこの儘帰られう、不便と思うて渡してたべ、慈悲ぢや情ぢや、聞分けて」と頼みつかこちつ手を合せ、嘆き沈むぞ哀れなり。こなたはなほも空吹く風、

「ム、それほど頼むなら渡してやらう、と云ふたらよからうが、マアいやぢや。おりやあの山伏に縁もなし、また由縁もなければ、渡されぬといふ訳を耳をさらへてよう聞けよ、われが尋ねる山伏の頼みには『様子あつて某は道成寺へ逃げ行く者十六七の女が来たら必ず渡してくれるな』と、小金くれて頼まれたれば、金の冥利でこの川を渡すことはならぬわい、寒気をしのぐ山伏の八重か一重か板一枚、下は地獄のこの商売、頼まれたらば男づく、いつかな渡さぬ、マアならぬ、われもまたどれほどに焦がれても及ばぬ恋ぢや、役にも立たぬ顎きかずと、足元の明るい内とつと、と去ね〜、エ、うち〜とうちついて棹の馳走を食らふか」

と慈悲も情もなか〜に渡す気色もなかりける。姫はあるにもあらばこそ、

「エ、聞えませぬ〜〜安珍さま、恨みはこつちに
あるものを、かへつてこの身に恥か、され、何と永らへ
みられうぞいなう、今日とても父上の御意見、ごもつと
もとは思へども、女は一度わが夫と思ひこんだら魔王で
も、例へ鬼でも変化でも可愛いといふ輪廻は離れず、ま
して五月の宮詣でにふつと見染めしその日より、愛し床
しい恋しいと夢現にも忘れかね、焦れ焦る、恋人に逢ふ
て嬉しい言葉を、語らふ間さへ情なや、恋の呵責に碎か
れて身は煩惱に繋がる、紅蓮の水、大焦熱阿鼻修羅地
獄へ落るとも、思切られぬ安珍さま、聞えぬわいな」

と身をもだへ、わつとばかりに声を上げ、嘆く涙の雨
車軸、その名も高き紀の国や、日高の川に水増して堤も
穿つごとくなり、泣く目を払ひすつくと立ち、

「エ、妬ましや腹立ちや、思ふ夫を寝取られし恨みは
誰に報ふべき、例へこの身は川水の底の藻屑となると
も、増しと思ふ一念のやはか晴さで置くべきか」

と心を定め見繕ひ、川辺に立つより水の面写す姿は大
蛇の有様、

「もはや添はれぬこの身の上、無間奈落へ沈まば沈め、
恨みを言ふて言ひ破り、取殺さいでおかうか」

と怒りの昵、齒を噛み鳴らし、あたりを睨んで火焰を吹き岸の蛇籠もどうく〜と青みきつたる水の面、ざぶんとこそは飛入つたり。舟長見るよりわな、き、

「鬼になつた、蛇になつた、角が生えた、毛が生えた、食殺されては叶はじ」

と跡をも見ずして一散に、飛ぶが如くに逃げてゆく。跡に怒りの髪逆立て、不思議や立浪逆巻いて、憤怒の頭へ角振立て、鱗逆立てくるく〜、怪しかりける

終わりに

説経節『日高川入相桜』の詞章の成立が、いつの時代になるものかは、もとより特定できない。また、前述のように、新内節『日高川入相桜』は、義太夫節『道成寺現在蛇鱗』を改作したもの、全段が伝わるも、現行の義太夫節『日高川入相花王』は、やはり『道成寺現在蛇鱗』を改作したもので『日高川入相花王』宝暦九年版とは著しく異なるので、この系譜には入れないことを前提に、説経節『日高川入相桜』がどのように成立したか、考えられる系譜を整理してみる。

一. 義太夫節『道成寺現在蛇鱗』から直接

二. 新内節『日高川』から

三. 義太夫節『道成寺現在蛇鱗』と、新内節『日高川』、双方から

(義太夫節『日高川入相花王』宝暦九年版、現行文楽『日高川入相花王』からの系譜は、考えられない。)

詞章の比較からは、三が最も妥当であろう。義太夫節『道成寺現在蛇鱗』は、ほとんど上演されていないし、新内節『日高川』も実際にはあまり耳にする機会はない。ただらうから、両者の版本が伝わって先ず説経節『日高川入相桜』の原版ができあがった。その後、両者の版本は失われ、原版も口承を重ねて、現行説経節『日高川入相桜』となったのだろう。それは、詞章の比較で見ただように、字句の誤りからも伺える。説経節の外題が、『日高川入相桜』とあるのは、現行文楽の外題『日高川入相花王』の影響を受けたものか。

字句の誤りや多少の不自然があるにせよ、それでも説経節は説経節として、独自色を出すことに成功している。それは、淨瑠璃風の定型句や文語的な表現を避け(時には、「い列」と「え列」の混同や科白の言葉尻に地域

色をも感じさせる)、かなり自在に改変した結果でもあ
る。口承に頼って伝えられてきたことの思わぬ効果と言
えよう。こうした詞章と、義太夫節や、新内節の豊かで
洗練された節に比べ、泥臭いと言われる説経節の節(こ
れも当然口承による)と相俟って作り出された世界であ
る。洋画家の鈴木信太郎の次の言葉は、八王子に伝承さ
れてきた説経節の性格を的確に表現していると思われる。
これを以て結びとする。

「田舎に埋もれた一派は、師匠から聞き覚えた一つの
文句を耳から口へ代々伝えるばかりで、書き写しのほん
の符牒のような貧弱な台本が幾つか残っているぐらい
で、大部分は口伝えの師匠の癖もそのまま鵜呑みにつづ
く伝統を、祖先の代から順々に何の改良も加えずに受け
継いでいるため、周囲がまったく変わったのにも気付か
ず、かえって『この方が本筋の古風の佛を残すものだろ
う』と三田村氏(著者註、三田村鳶魚)にほめられたの
であった。」(註8)

註

註1 説経節の沿革については、『新潮日本古典集成 説経節』の
室木弥太郎の解説他、各種参考文献を参考にした。

註2 系譜については、小澤勝美「多摩地方の説経浄瑠璃の系譜」
(多摩のあゆみ第五十七号)を中心に、各種資料を参考にした。

註3 昭和六十一年設立。八王子に残る「薩摩派説教節」の保存・
伝承に務める。平成五年東京都指定無形文化財に認定される。

註4 佐渡に残る説経節は、八王子などに伝わる説経節とは異なる。
あるいは、前期説経節の伝承されたものか。

註5 秩父横瀬の若林新一郎(若松佐登太夫 家所蔵本一覽(『多
摩のあゆみ第八十号』平成七年 たましん地域文化財団、
七十五―六頁)も大きな異同は見られない。

註6 『国立劇場上演資料集(五二二)』第一六七回文楽公演 寿式
三番叟 伊勢音頭恋寝刃 日高川入相花王 ひらかな盛衰
記』の内山美樹子による「日高川入相」解説を参照

註7 比較に際して、正本は、義太夫節「道成寺現在蛇鱗」、同現
行「日高川入相花王」は、『国立劇場上演資料集(五二二)』
第一六七回文楽公演 寿式三番叟 伊勢音頭恋寝刃 日高
川入相花王 ひらかな盛衰記(国立劇場調査養成部調査
記録課編、平成二十一年 日本芸術文化振興会) から、新
内節「日高川」は、『定本新内集』(岡本文弥編、平成七年、
同成社)から、説経節「日高川入相桜」は、『日本文化の伏
流 民衆芸能 説経節集』(多摩の歴史・文化・自然環境研
究会編、平成十年、法政大学多摩地域社会研究センター)

から、それぞれ引用した。

註8 「八王子車人形覺書」鈴木信太郎、復刻版 諸國の人形芝居」

一八五頁。大正十三年五月二十二日に、坪内逍遙、三田村
鳶魚、小田内通久らが八王子を訪れ、後の十代目薩摩若太
夫（内田総淑）らの語った説経淨瑠璃と小泉信久座の車人
形に感銘を受け、その説経淨瑠璃に折紙を受けたという（小
澤勝美「多摩地方の説経淨瑠璃の系譜」、『多摩のあゆみ第
五十七号』、十一頁）。

参考文献

『説経節』新潮日本古典集成、室木弥太郎校注、昭和五十二年、新
潮社

『説経節』東洋文庫243、荒木繁・山本左右吉編注、昭和四十八
年初刷、平成四年第十八刷 平凡社

『説経正本集』全三巻、横山重校訂、昭和四十三年、角川書店

『日本文化の伏流 民衆芸能 説経節集』「多摩の歴史・文化・自然
環境」研究会編、平成十年、法政大学多摩地域社会研究センター

『国立劇場上演資料集（五二二） 第一六七回文楽公演 寿式三番叟
伊勢音頭恋寝刃 日高川入相花王 ひらかな盛衰記』国立劇場調
査養成部調査記録課編、平成二十一年、日本芸術文化振興会

『定本新内集』岡本文弥編、平成七年、同成社

『復刻版 諸國の人形芝居』河竹繁俊編著、新葉社、平成十年、
一八五頁

『声曲類纂』齋藤月岑編著、藤田徳太郎校訂、昭和十六年初刷、平
成十三年第六刷、岩波文庫 岩波書店

『三田村鳶魚全集』第廿一卷、三田村鳶魚著、昭和五十二年、中央
公論社

『近世日本藝能記』黒木勘藏著、昭和十八年、青磁社

『淨瑠璃史』黒木勘藏著、昭和十八年、青磁社

『多摩のあゆみ第五十七号』平成元年、たましん地域文化財団

『多摩のあゆみ第八十号』平成七年、たましん地域文化財団

『新版色道大鏡』藤本箕山著、新版色道大鏡刊行会編、平成十八年、
八木書店

『富本及新内全集』日本音曲全集第九巻、中内蝶二・田村西男編輯、
昭和二年、日本音曲全集刊行会

『藝能辞典』河竹繁俊監修、演劇博物館編、昭和二十八年、東京堂

『江戸音曲事典』小野武雄編著、昭和五十四年、展望社

『日本音楽の歴史』吉川英史著、昭和四十年初刷、昭和四十三年第
四版、創元社

『日本音楽文化史』吉川英史編、平成元年、創元社

『説教と話芸』関山和夫著、昭和三十九年、青蛙房

『説経節の世界』藤掛和美著、平成五年、ペリかん社

『嬉遊笑覧』全五冊、喜多村筠庭著、長谷川強ほか校訂、平成十四
—二十一年、岩波文庫 岩波書店

『近世風俗史（守貞謄稿）』全五冊、喜田川守貞著、宇佐見英機校訂、
平成八—十四年 岩波文庫 岩波書店

『小栗判官の世界』宮川孝之ほか編、平成七年、第五回全国をぐり
サミット「八王子人形劇フェスティバル」実行委員会